

選択のあみだくじ

2025 年 11 月 1 日 前川 宗久(元・三菱電機)

振り返ると、人生の岐路での大小の「決心」・「決断」の軌跡が今の自分を成立させている。
私的には「決心」・「決断」という強い表現より、様々なシチュエーションでの「選択」の系譜という方がソフトでぴったりと心に収まる。

そして「選択」といえば、14 年前の NHK 白熱教室に登場したコロンビア大学・シーナ・アイエンガー教授の講義が忘れられない。彼女の『選択の科学』（原題：The Art of Choosing）という本は今も私の枕元に積んであり、多くの付箋が挟みこまれている。

まず本書の概要を、私のへたな講釈より AI に任せて、以下にご紹介する。

■シーナ・アイエンガーは『選択の科学』の中で、人生を形づくる要素について非常に印象的な表現を用いています。彼女は人生が「選択」「偶然」「運命」の三つの要素の掛け合わせで成り立っていると述べています。具体的には、以下のような言葉で表現しています：

「人生＝選択 × 偶然 × 運命」

この「三元連立方程式」は、彼女が本書で提示する人生観の核心です。

- ①運命：生まれ育った環境や親の価値観、文化的背景など、自分では選べないもの
 - ②偶然：予期せぬ出来事、病気や事故、他者の死など、コントロールできない出来事
 - ③選択：唯一、自分の意思でコントロールできる要素
- これこそが人生をより良くするために磨くべき力

アイエンガー自身、厳格なシーク教徒の家庭に育ち、視力を失うという大きな偶然に見舞われながらも、アメリカで「自分で選ぶ」という文化に触れたことで、
人生を「選択」という文脈で捉えるようになったと語っています ※以上、AI 要約より抜粋

ここからは私見。

拙文の冒頭に、決心と選択について表現を選んだのは決心＝選択と短絡させたくないからだ。
まず選択し、選択に基づく行動・変化を起こすのが決心・決断・決意だと思う。
このままでいいという現状維持の選択もあるが、決心とは言い難い。
決心は、選択に従って現状を変えていくというプロアクティブな決意であり、行動の原点なのだ

人生って、その時点時点で選択肢がある「あみだくじ」の軌跡ともいえる。
その「あみだくじ」の軌跡の中で起こる「偶然」も、実はその範囲や方向性がそれ以前の「選択」の道筋の中で影響を受けてスコープされ、収斂していくのではないか。
つまり、アイエンガーがいう三元連立方程式の中の「偶然」は独立変数ではなく、「選択」の影響を受ける従属変数の性格を持つという理解である。
「偶然」に、選択の「あみだくじ」が起因するものがあるなら、今現れた偶然もそれまでの本人の選択の系譜に見合ったものかもしれず、これらを含めた「偶然」が次の「選択肢」となっていくのだろう。

以上の私見は、世の中で自明のことかもしれないが、私の人生史の中から、青春期と現在地でふたつのエポックを取り上げて、前述の文脈に絡めながらこれを振り返ってみたい。

(1) 美和(妻)との出会い

美和とは28歳のとき、和歌山市の成人学級にある「油絵教室」で出会った。なぜ和歌山市か？就職の初任地だったから。本当は研究所勤務を希望するも当時、高専卒はNGだった。なぜ高専か？父が定年になる年に20歳で社会人となれる安上りな国費の学府という経済的理由。なぜ油絵教室か？幼少時より画才があったようで貧しい暮らしの中でもクレパス・絵具の類は総て絵画展の賞品で賄い、高専でも洋画部の創立に携わったという流れだ。ここまでは、アイエンガーの「運命」変数が支配的である。

なぜ、社外の文化活動に参加？学生時代や社内のそれまでの「モテ期ゼロ」を払拭するための「選択」だったから。このあたりからより自発的な「あみだくじ」を辿ることになる。そして、教室に通っていた美和を知る。野外写生行事で起こした枯草のボヤ騒ぎでの彼女の振る舞いに魅せられたのが付き合うきっかけ。そこからの♂の本能的な小さな選択を、勇気と決心で重ね、プロポーズに至った。さて、彼女との出会い。それだけ切り取ると単純に「偶然」ということになるが、その偶然は、それまでの自身の「あみだくじ」の変数経緯がなければ生じなかった必然的偶然である。

そして、その後に共に歩んだ人生の中で彼女との出会いは、今、私の中で「運命」となっている。
(美和さん HP: <https://m-munet.com/index.html>)

(2) 視覚障害者との関わり

私の日常は、平日午後の家族4人の夕飯作りを除き、多くの時間を目の不自由な人のサポートに費やしている。10年前から、各種書籍や刊行物の朗読・録音・配信をボランティアで行う団体に所属。例えば和歌山県庁のHPから流れる毎月の「県民の友」の知事メッセージは私の声だ。なぜ障害者支援か？現役時代、社内工場の設計システムを多く手がけたが会社の業績に直結したかは怪しい。何億、ムダ金を使わせたか、という心苦しさがあり、リタイア後は、もっと直接的に「誰かの役に立ってる」実感が得られる活動に憧れた。それが障害者支援に繋がっている。なぜ視覚障害者か？人が外界から得る情報の8~9割は視覚から得られる。視覚が障害を受けることの苦しみは想像を絶するものだ。そして微力ながらもその方たちの役に立てればと志した。

今年8月に後期退職者になった。直面したのは企業年金の激減と社会保険料のUP、つまり私の中での「75歳の壁」だ。この先、ボランティアだけで飯は食えぬ。そんな時、マンツーマンで本の読み聞かせをする対面朗読の利用者の方から「同行援護」という「仕事」を知った。これは目の不自由な方の外出ガイドヘルパーであり、従事者の資格取得が必要だ。1カ月余りかけて資格を得、今、アルバイト的にその仕事に携わっている。

さて、この話は私の心のありようが「選択」と「決心」を繋ぎ、「同行援護」という偶然に遭遇した例だ。

前述したアイエンガーは全盲の学者である。
その著作との出会いから、「目が不自由」な人たちとの関りが既に始まっていたのなら戦慄的だが、総じてみると、これも「運命」というべきか。 【筆者 近影】→

